

〈学会参加報告〉

「十到十三世紀中国政治与社会科学術研討会
暨嶺南宋史研究会第二屆年会」参加記

塩 卓 悟

二〇一一年十一月二十六日から二十七日にかけて、中国広東省広州市中山大学において「十到十三世紀中国政治与社会科学術研討会暨嶺南宋史研究会第二屆年会」が開催された。

嶺南宋史研究会は、張其凡氏（暨南大学）、戴仁柱氏（香港嶺南大学）、何冠環氏（香港理工大学）、曹家齊氏（中山大学）らが発起人となつて、二〇一〇年十一月六日から七日にかけて広州市の中国聯通大厦において開催された「十到十三世紀中国边境和対外関係問題學術研討会暨嶺南宋史研究会成立大会」において成立したものである。第一回大会においては、韓国の中国史研究者を招聘して、国際学会を開催した。

二度目となる今大会は、海外より日本人の中国史研究者を招聘して挙行された。参加した日本人研究者は六名。近年の中国の国際学会で少しずつ見られる傾向であるが、いずれも中国までの旅費は自費であるものの、参加費・宿泊費・食費は無料であった。筆者は十一月二十五日に、中山大学紫荆園において参加登録を行った。

翌二十六日、七時三〇分より紫荆園一階にある宴会場にて朝食をと

り、八時四〇分より永芳堂二階講学庁で開幕式が挙行され、中山大学歴史学系主任の呉義雄氏、嶺南宋史研究会会長戴仁柱氏、中国宋史研究会会長鄧小南氏らによる挨拶が行われた。九時一〇分より永芳堂の前で参加者全員の記念撮影を行い、ティータイムをへたのち、九時四十五分より大会が開始された。

本大会の研究報告者並びに報告内容は、以下の通りである。繁体字は当用漢字に改め、報告者の敬称は省略している。^①

十一月二十六日

九時四十五分—十二時 主題発言（永芳堂二樓講学庁；主持人：熊燕軍、評議人：包偉民）

許振興：岳飛冤死的真相

平田茂樹：宋代日記所見御前會議与宰執會議

李裕民：“祖宗之法”是實施慶曆新政的武器——富弼《三朝政要》

研究

李華瑞：宋朝積弱再認識

十四時—十八時十五分 分組討論

十四時—十六時 分組討論上半場

第一組（永芳堂二樓講學序；主持人：楊 芹；評議人：虞雲國、平

田茂樹）

久保田和男：宋都的宮城前空間——關於開封宣德門與御街、御廊的

比較都城史考察

王化雨：宋代視朝活動探研——以時間和班次為中心

胡勁茵：樂制改革與景祐政治

小林隆道：宋代文書行政中的“備”以“備准”、“備牒”、“備申”

為中心

劉廣豐：宋代特殊政治勢力與女主權利的互動——以劉太后統治時

期為中心

宮崎聖明：南宋初期的行政功能恢復過程

第二組（永芳堂三樓講學序；主持人：趙燦鵬；評議人：戴建國、黃

純艷）

包偉民：宋代鄉制再議

劉光臨：廣東州府宋元明之際兩稅徵收的比較研究——以連州、廣

州、潮州、惠州為例

魏天安：北宋後期的蔡京茶法

吳宏岐：《馬氏二十四娘買地券》與南漢與王府附郭墓問題

朱文慧：南宋社會的民間調解與基層社會治理

梁思樂：宋代皇室祖籍及祖墳爭論溯源

十六時十五分—十八時十五分 分組討論下半場

第一組（永芳堂二樓講學序；主持人：李華瑞；評議人：鄧小南、湯

勤福）

范立舟：彌勒信仰與宋元白蓮教

王承文：唐宋時期嶺南南部沿海的雷神崇拜及其影響——以唐人房千

里所撰《投荒雜錄》為中心的考察

易素梅：宋代紹興曹娥信仰

王章偉：《清明集》中的巫覡信仰問題

塩卓悟：唐宋時期的女性與肉食現象——以《太平廣記》、《夷堅志》

為線索

蔡崇禧：北宋中葉興起的臘梅賞詠風尚

第二組（永芳堂三樓講學序；主持人：劉光臨；評議人：王化雨、吳

雅婷、吳錚強）

李偉國：宋代官員落致仕例析

曹家齊：由唐到宋的身言書判試

宋哲文：北宋元祐間經義、詩賦進士二科分合問題考論

朱銘堅：淺談“蘇嘉案”與熙寧太學學制改革

石聲偉：北宋真宗朝資善堂考述

吳業國：宋代官員考覈的歷史考察

十一月二十七日

八時—九時四十五分 分科會上半場

第一組（永芳堂二樓講學序；主持人：魏天安；評議人：戴仁柱、李

偉國）

郭声波…《宋会要輯稿·文陞》補正——兼析其闕誤原因

趙燦鵬…全祖望与《宋会要》

戴建国…《慶元条法事類》法条源流考

楊芹…宋代制誥收入別集情況初探

黃慧嫻…呂中《皇朝大事記》对王安石变法的評價

熊燕軍…南宋佚名《昭忠錄》作者考——兼論《昭忠錄》与《昭忠逸

詠》的關係

第二組（永芳堂三樓講字序：主持人：王承文；評議人：鄒重華、吳

錚強）

湯勤福…道統之爭与政統之爭…兩宋時期的一樁公案

黃純艷…宋朝对西南少数民族的政策

毛利英介…論遼宋時期的“入国”

文曉揚…沈括使遼与當時的政治鬥爭

趙炳林…論五代宋初的瑤族將領秦再雄

熊鳴琴…歷史上的“中国”概念之演進——立足于近三十年的研究

綜述

十時—十一時四十五分 分組討論下半场

第一組（永芳堂二樓講字序：主持人：白曉霞；評議人：郭声波、曾

震宇）

何冠環…北宋外戚將門開封浚儀石氏第三代传人石元孫事蹟考述

李貴錄…北宋文臣的道義之交——以余靖、歐陽修的交流為例

吳雅婷…三蘇南行集所見士大夫行旅活動

鄒陳惠儀…曾鞏的政治經世思想——從“法先王”說起

盧萍…宋代廣州知州对州学的貢獻和影響

張小平…宋代羅浮山遊樂活動与官方公共服務

第二組（永芳堂三樓講字序：主持人：王化雨；評議人：久保田和

男、卜永堅）

虞雲国…南宋初期降偽遊寇略論

曾震宇…金初“以水德王”探析——立足於金海陵王一朝的考察

郭紅超…靖康之難中四道都總管設置探析

黃明康…開禧北伐…宋金關係与兩國互信的摧毀——兼論輿論对北伐

始末的影響

吳錚強…從理學家的党爭史到理學的政治文化史——評余英時《朱熹

的歷史世界——宋代士大夫政治文化研究》

鄒重華…關於美国學者郝若貝（Harwell）給宋代專業精英所下五

点定義的商榷

以上の報告後、二十七日午前十一時より閉会式が行われ、本大会は終了した。筆者は、二十六日午前は「主題発言」に、午後は前半後半ともに第一組に、二十七日の午前は第二組に参加した。

当会議の個別報告に関して逐一評論することは紙幅の都合上難しいため、本稿では、全体的に感じた印象と筆者が特に関心を持った報告に関して述べておきたい。二十六日午前に開催された「主題発言」では、各報告時間が二十分、評議が三十分、質疑応答が二十五分であり、一方、「分組討論」においては、各報告時間十分、評議十五分、余った時間で質疑応答という時間構成であった。いずれの会においても、報告、評議、質疑応答は白熱したが、おおむね予定時間を超過し

ないように各司会者の工夫がなされていた。

ただ、今回の会議に限ったことではないが、中国の国際会議での十分間という短い報告時間に慣れておらず、拙い語学力しか有していない筆者のような日本人研究者にとつては、短い報告時間においても中国語で報告する訓練が今後必要であると改めて痛感した。昨今、中国語を十二分に駆使できる（特に若手）日本人研究者も、一昔前と比べると、格段に増加しており、その一方で、日本で学んだ経験を持つ中国人の若手研究者も増加しているため、中国史研究の分野においても今後ますますグローバル化は進められていくに違いない²。従って、もはや、日本の中国史研究においても、高度な中国語運用能力が必要不可欠なものになった感がある。

次に感じたのは、当学会における報告分野の幅広さと活気である。当会は、五十二名にも及ぶ研究者が報告を行った。二十六日午前の「主題発言」では、許振興氏、平田茂樹氏、李裕民氏、李華瑞氏ら四氏による政治史での報告がなされたが、その後の「分組討論」においては、各六名ずつの構成で、二十六日午後前半部の第一組が政治史、第二組が政治制度・経済・社会史、同後半部の第一組が文化史、第二組が政治史、二十七日午前前半の第一組が文化史、第二組が政治・外交史分野の報告がそれぞれなされた。経済史分野がやや少なかったものの、政治・社会・文化史とさまざまな分野にわたって、現在および今後の中国の学会を担う研究者が報告を行ったが、全体的に中堅・若手研究者が多く、非常に活気があり、今後の当会の大きな発展の可能性を感じさせられた。

筆者が参加した会のうち、特に印象に残ったいくつかの報告につい

て簡略に紹介しておきたい。「主題発言」の許振興氏の「岳飛冤死的真相」は、南宋官修史書などの史料をもとに、丹念に岳飛が入獄から死刑に処せられるまでの過程を明らかにした非常に興味深い報告であった。日本では岳飛よりもむしろ秦檜の歴史的意義に着目した研究が中心であるのに対して、中国における岳飛に関する関心の高さが窺えた報告であった。

二十六日午後前半部の第一組の劉広豊「宋代特殊政治勢力与女主権利的互動——以劉太后統治時期為中心」は、真宗の皇后であった劉太后の垂簾聽政に着目し、彼女が、外戚・宦官・上層階級の女性たちに対して抑制を加える一方で、いかに巧みにそれらを利用して政治を行ったのかを指摘した。皇帝独裁体制の中で非常に限界性を帯び、否定的にみられることも多かった劉太后の世に関して、詳細な検討に基づいて、積極的に評価しようとする点が斬新であると思われる⁴。

二十六日午後後半部の第一組の易素梅「宋代紹興曹娥信仰」は、宋代の紹興における曹娥信仰を、その成り立ちや宋代における孝道の顕彰と関連づけながら論じている。筆者も、以前、割股と孝道の関連を考察したことがあるため⁵、同報告に大きな関心を抱いた。

二十七日午前前半部の第二組の熊鳴琴「歴史的「中国」概念之演進——立足于近三十年来的研究綜述」は、「中国」概念がいかに形成・発展してきたのかを日本の中国古代史研究の成果もひきつつ、検討を行っているが、さらに今後、日中両国の文化人類学・民俗学の成果をふまえて、研究が発展していくことが期待される。ほかにも多くの興味深い報告があるが、紙幅の都合上、個別報告の紹介は以上にとどめておきたい。

さて、閉会式終了後、当大会に参加した日本人研究者五名と、中山大学博雅学院講師の胡勁茵氏、中山大学碩士の王燕萍氏の七名で、南海I号が発見された広東省陽江市へと向かい、広東海上絲綢之路博物館を見学した⁽⁶⁾。同館は、南海I号より発見された陶磁器などのさまざまな遺物が展示されており、今後の新たな可能性を非常に感じさせる博物館であった。

日本の中国史研究を海外に発信することの重要性は、以前にも筆者は指摘したことがある⁽⁷⁾。この十年間、特に日本人若手研究者による海外交流・海外への発信力が非常に高まってきたことは筆者も痛感している。ただその一方で、優秀な能力を持ちながらも、経済的事情により、かかる契機に参加できない非常勤職の研究者や若手研究者たちが多く存在していることも事実である。しかし、国際学会参加の経験は研究者にとって必ずや大きな財産となるはずである。そのような方々に（もちろん筆者自身も含めて）も、可能な限り、機会があれば、是非、国際学会という場に積極的に挑戦すべきだと考える。

近年、インターネットが急速に普及するなかで、国際学会に関する情報も以前には考えられないほど、容易に入手することが可能になっている。しかし、インターネットで検索可能とはいえ、国内外を問わず、陸続と国際学会が開催される昨今の情勢を鑑みるに、やはり、自身が参加した国際学会の紹介をすることによって、当学会に参加できなかった日本人研究者たちの関心を喚起することはきわめて重要であり、またそれが、参加させていただいた学会の主催者に対する謝意を示すものと筆者は考える⁽⁸⁾。

「十到十三世紀中国政治与社会科学術研討会暨嶺南宋史研究会第三屆

年会」は二〇一二年十二月八日から十二月九日にかけて、香港嶺南大學において、「宋代文化、社会と教育」というテーマで開催される予定である。次回大会では、アメリカ人研究者が招聘されることであるが、日本からもより多くの研究者が当会議に参加されることを望みたい。

末筆ではあるが、この国際会議参加にあたっては、科学研究費補助金基盤研究Bによる助成を受けた。また、当学会の運営にあたられた曹家齐氏（中山大学）はじめ中山大學の皆様より一方ならぬご厚意を受けたこと、『南方日報』ならびに広東海上絲綢之路博物館には南海I号見学にご配慮を賜ったこと、あわせて謹んで謝意を表したい。

註

(1) 本大会の報告者ならびに報告内容に関しては、中国社会科学院歴史研究所遼宋金元史研究所ホームページ「四史同堂」(<http://www.jsy-shi.cn/SDT/2011/1210/112101052147DK73189401CBJH4951K.html>)や「史林雜識」(<http://www.wangf.net/vb/2/showthread.php?s=a6339421db86dd5eed17ed15627816&theadid=26395>)、「楽学酷」(<http://www.xuelaku.com/forum.php?mod=viewthread&tid=577450>)にも掲載されている。

(2) たとえば、佐川英治氏は、「(国外学会参加報告) 中古時代的礼儀、宗教与制度学術研討会」(『唐代史研究』一四、二〇一一年)の中で、現在の中国の若手研究者が日本の研究に関心を持ち、これを受け入れる柔軟性を持っており、そうした状況が、今後、世代交代の波の中で中国史像の再構築を行う可能性を秘めていることを指摘している。氏の指摘の如く、今後、中国史研究における日中両国相互の協力・補完関係はさらに強化されていくに違いない。

(3) 日本における秦檜研究の代表的なものとしては、寺地遵「南宋初期

政治史研究」(溪水社、一九八八年)が挙げられる。一方、岳飛に関する研究は非常に乏しく、近年では、榎並岳史「岳飛による長江中流域支配に関する一考察」(『新潟史学』五二、二〇〇四年)の研究のほか、あまり見あたらない。日本人研究者の視点からみた岳飛研究の今後の深化も期待したい。

(4) 劉静貞「從皇帝干政到太后摂政——北宋真仁之際女主政治権力試探」(『国際宋史研討会論文集』一九八八年、のち、鮑家麟編『中国婦女史論集続集』、稲郷出版社、一九九一年所収)では、君主独裁制の下、劉太后期の女主政治の限界性を指摘している。また、千葉史「宋代の后妃——太祖・太宗・真宗・仁宗四朝——」(青山博士古稀記念宋代史論叢、省心書房、一九七四年)では、劉皇后を外戚への加恩も顕著であり、また旧来の伝統を無視して、皇族の女性たちにも思うままに恩威を加えた、と否定的な見解をしている。なお、宋代の垂簾聴政のシステムに関しては、平田茂樹氏「宋代の垂簾聴政について」(柳田節子先生古稀記念 中国の伝統社会と家族、汲古書院、一九九三年)を参照されたい。

(5) 塩卓悟「唐宋人肉食考」(『洛北史学』十二、二〇一〇年)。なお、中国の孝道に関しては、桑原隲蔵「支那の孝道——珠に法律上より見たる支那の孝道——」(西田直二郎編『狩野教授還暦記念支那学論叢』、弘文堂、一九三〇年、のち『桑原隲蔵全集』三卷、岩波書店、一九六八年所収)をその代表的研究として挙げる事ができる。

(6) 南海Ⅰ号墓は、一九八七年、広東省陽江市付近の海域から、陶磁器を満載した宋代の沈没船が発見され、その後、いくたびかの調査を経て、二〇〇七年、南海Ⅰ号と命名された宋船が引き上げられ、そのまま広東海上絲綢之路博物館に保管されることになった。その発掘報告については、広東省文物考古研究所「二〇一一年「南海Ⅰ号」の考古試掘」(科学出版社、二〇一一年)を参照されたい。なお、当館における取材状況は、(<http://www.xjfb.com.cn/web/new/sbdcw/wc-binfo/2011/11/29/132221155998313.htm>)を参照された。

(7) 塩卓悟「学会参加報告」中国宋史研究会第十届年会暨唐宋五代宋初

(8)

西北史研討会参加記」(『史泉』九七、二〇〇三年)。
すでに船田善之氏も「海外の国際会議の概要を迅速に国内で報告するのは参加者の義務である」と述べておられるが(『中国蒙元史学術研討会暨方齡貴教授90華誕慶祝会 参加報告』13、14世紀東アジア史料通信』第十三号、二〇一〇年、注1)、筆者も氏の意見に同感である。

(関西大学文学部・非常勤講師)